

わたくしは、この本を書きかけてから、どうしたものかよく両親に関連した夢を見たのである。

ある時は、楽しかった幼い頃の思い出にふけて、限りもない懐舊の念にひたり、

ある時は、跡形もなく消えうせた故里のわが家の辺りをさまようて来し方をしのび、

さては、恩師のこと、舊友のこと、親戚のことなどに至るまで、常に亡くなった両親を中心として涙の印象をたどり、あたかも鎖のように、それからそれへと夢見つづけたのであるが、しかし、その中でも、
今なほ、空しい夢の跡を追いつつ、どうしても忘れかねる一事があるのである。

今から四年ほど前の秋の暮れ頃であった。

ある時、二階の奥にあるわたくしの書斎・・・叡山を右手に望む見晴らしのいい室にとじこもって、例の通り書きかけの原稿を書いて居ると、何時の間にか、軽い疲れを覚えて、ついそのまま机にもたれてうたたねをしてしまったのである。

ところが、思いがけなくも、そこに、なつかしい父と母とが来られて、わたくしの手傳いをして下さっておられるのであった！

父や母は、わたくしどもが、常に自分の胸の中にお姿をえがいて、永遠に切なる追慕の標的として守って居るものであるから、わたくしも、最初の間は、さすがにうれしく、なつかしい父母の膝下にいそいそとして原稿の整理に努めておったのである。